

X I. 須川地区

1 須川地区の概要

須川地籍は「日本の原風景」とでも言うべき、風情ある地域です。田端・古屋敷地籍（現在の中心部よりも丸子寄り）からは須恵器なども見つかったことから地域の歴史は古く、古墳時代に遡ることができるものと思われます。また、地域の中心は現在とはちがって、田端・古屋敷のあたりだったことが想像できます。

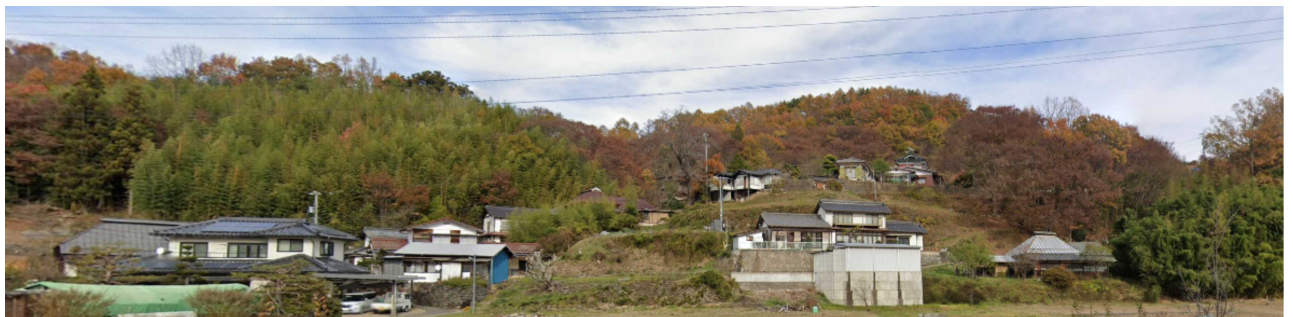
歴史に残っていることとしては、慶長6（1601）年、眞田信之が、重臣である大熊五郎左衛門に「小牧69貫文と須川9貫文余りの知行地を与えた」という文書が「須川」という地名の文書初見と思われます。

須川は元々、諏訪形村の枝村でした。江戸時代中期の安永3（1774）年には須川に組頭を置くことが許可されました。なお、「組頭」とは庄屋の補佐役を勤める役職です。なお、大字小牧地区にも須川の農地があり、農地を持っている人はひとりあたり2升2合の年貢を支払っていました。

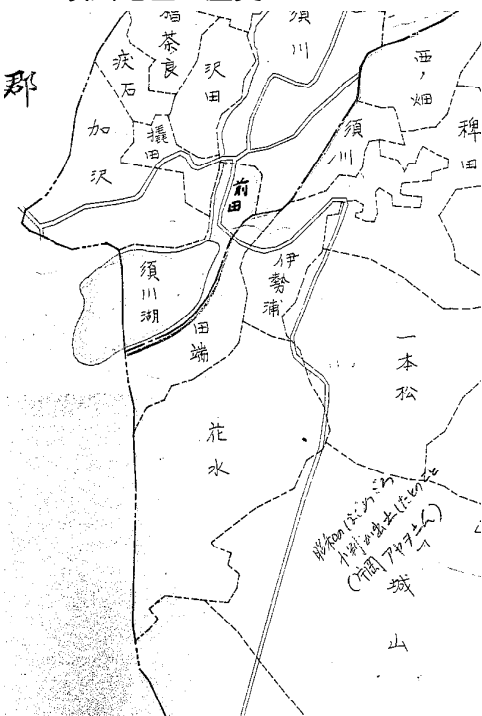
その後明治22（1889）年には町村制施行に伴って新たに「諏訪形区」が誕生した際、須川諏訪神社など従来、須川が所有していた土地や建物などの財産の権利について、本区（諏訪形）側にかなり大きく譲歩した、ということもありました。

上田市自治会連合会のホームページでは次のように紹介されています。

須川自治会は上田市のほぼ中心に位置するも、山間地であることから市街地への移住が進み、住居戸数の減少と高齢化率の上昇による自治会存続が懸念されている状況です。そんな中ではありますが、自治会存続のため重複する役を受け入れし頑張っています。当自治会には須川池があり昭和28年「全日本ケート選手権」の開催、映画「およう」のラストシーンのロケ地など意外と面白い土地でもあります。この池が今後市民の憩いの場所になればいいと期待しているところです。



2 須川地区の歴史



はっきりとした記録は残っていないものの、前述のとおり、須川集落の形成はかなり古い時代まで遡ることができるようです。古くは、須川の集落は現在の場所より尾野山寄り（南寄り）の、周囲が見渡せる高台である「田端地区」または「花水地区」にあったようで、田端地区の「古屋敷」という地籍からは須恵器（主に古墳時代から平安時代にかけて作られた土器）や矢尻などがみついています。このことは、ここに有力者の拠点が置かれていたことが推察されます。「はな」は「端」に通じることから、集落からやや離れた場所、または集落の周辺に当たる場所というような解釈もできるようです。

伝わるところによると、鎌倉勢から逃れてきた人たちが住み着いた集落ともされていて、敵が攻めてきたときには早々に逃げ出すことができるように見晴らしの良い高台に住んだ、とも言われています。また、漫画家手塚治虫の祖先に当たるとされている平安時代末期の武将、手塚太郎金刺光盛とその一族に連なる人たちを祖先に持つ方々もおられるようです。

須川集落の花水地籍には「巴御前が花を愛で、花を摘んだ」という伝承も残っているようですが、巴御前については実在そのものも含めて疑問も残ります。このことについては、本稿の『荒神宮参上神社』をご参照ください。また、後述の女学生たちが開墾を行ったのはこの花水地籍です。なお、上の地図は南北がほぼ逆になっています。

【コラム 手塚一族と須川】

須川には、漫画家手塚治虫や現在須川に住んでいる「手塚」姓の方々の祖先、手塚太郎金刺光盛の一族のものとされる墓塔があります。4基並んだこの塔は手塚一族が春秋の彼岸に先祖祭をする場所です。

手塚太郎金刺光盛は木曾義仲に従った武将で、『源平盛衰記』では「信濃国諏訪郡の住人」と記されていますが、近年の研究では上田市手塚を本拠にしていたという説が有力なようです。寿永3（1184）年、粟津の戦いで義仲とともに討ち死にしています。

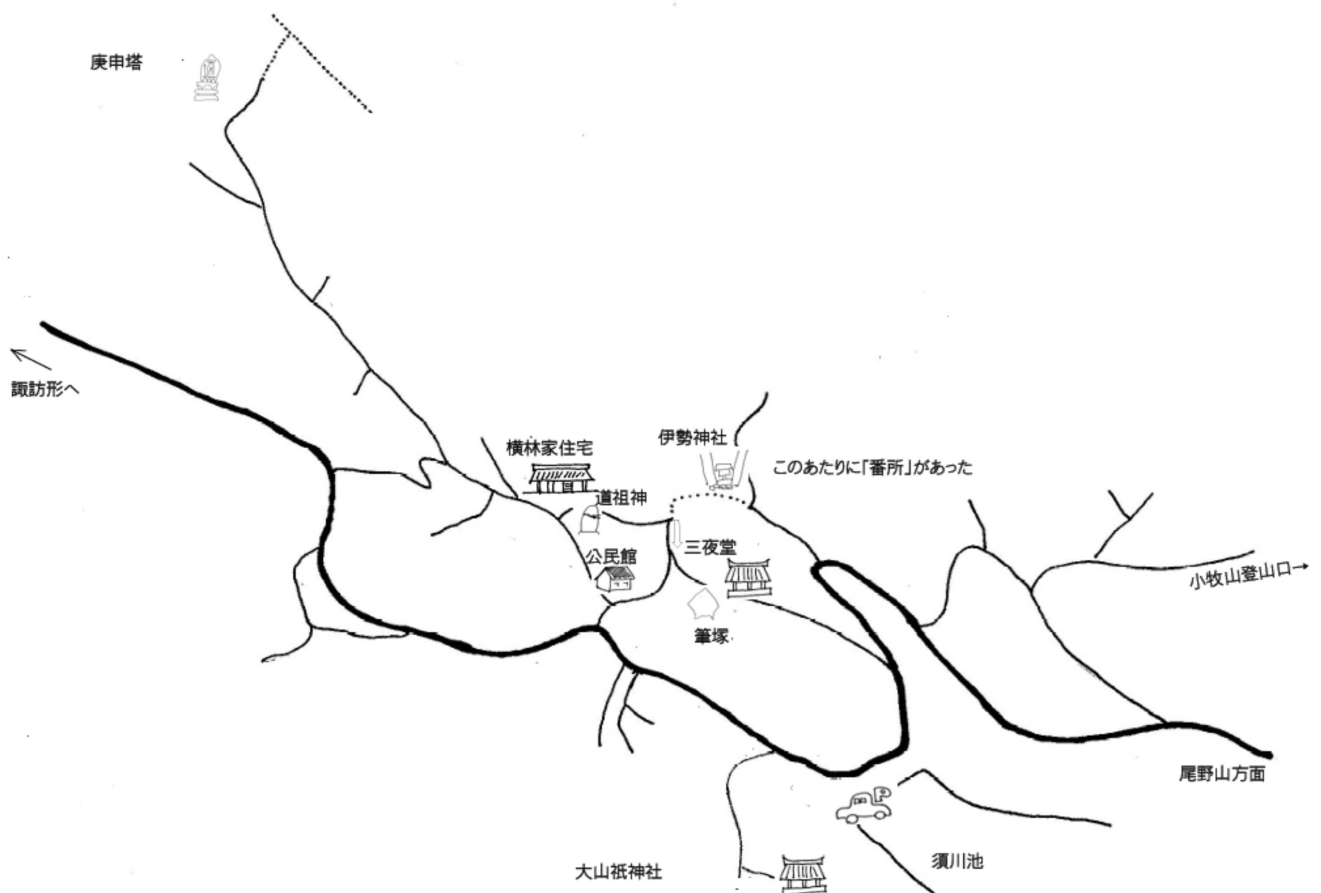
墓塔は江戸時代中期の宝篋印塔（ほうきょういんとう）で、落人となった手塚家の人々はこれらの塔に「手塚」の名を記さなかった、とのこと。

なお、宝篋印塔とは供養塔や墓碑塔などに使われる仏塔の一種で、中国からの伝来後日本で独自の発展をしてきた塔です。五輪塔とともに平安時代以降多く造られ、石造の遺品が多く残されています。「100年以上前の先祖を供養するためのお墓」とも言われ、現代でも、特に先祖代々の家系図が残る名家や旧家のお墓、寺院の歴代墓などで、遠いご先祖様の供養のために建てられることがあります。



参考文献：Webサイト「お墓きわめびとの会」

3 須川地区散策



（1）伊勢神社（お伊勢様）

須川地区を一望できる高台に、地元では「お伊勢様」と呼ばれて大切に守られている「伊勢神社」が祀られています。「お伊勢様（伊勢神宮）」は天上界を支配する天津神の総称です。本稿1ページの古い地図で、この神社周辺の水田（地図上で小字が「伊勢浦」となっている部分）は「伊勢免」と呼ばれ、神社を維持するために租税が免除されていた場所です。

伊勢神社の祠は小さいながら、「棟持柱（むなもちばしら・神明造りで、両妻の側柱外にあって棟を支える柱）」を持つ、しっかりとしたものです。このような構造は本家の（？）伊勢神宮にも見られ、共通性があります。また、「鯉木（屋根の上に棟に直角になるように何本か平行して並べた部材）」が

3本であることから、「男神」を祀ったものと考えられるようです。そうであるなら、伊勢神宮外宮「豊受大神宮」と同様、食と産業の神様とされる豊受大御神（とようけのおおみかみ）が祭神であるのかもしれない。ただし、「鯉木が奇数なら男神、偶数なら女神」という話は俗説であるという見解もあるようです（山梨県立図書館のデータベースによる）。



祠の土台部分には「寛政四歳（注：1792年）造之」と刻まれた石が見られます。また、祠の裏には大きな岩（縦横160cm×130cm・高さ60cm）もあります。この大岩は盤座（いわくら・神が鎮座する場所）ではないかと思われます。



杉の大木に守られたお伊勢様



この神社のある場所は、上田から丸子方面に通じる古い街道のすぐ近くで、「番屋跡」と考えられている場所にも隣接していることから、交通の要所にあったことが推定されます。この神社は現在でも地域の人々によって大切に守られており、毎年、秋の諏訪神社のお祭りの日に合わせてお祭りが行われているとのこと。

一方この須川地区には、現在はありますが過去には地上界を支配する国津神である「諏訪神社」もありました（現在は諏訪形の諏訪神社内に移転し「天神宮」となっています）。さらには、愛媛県に本社がある「大山祇神」を祀る神社もあります。このように、多くの神々を祀る神社が須川のような小規模の集落で見られることはたいへん珍しいことではないかと思われます。

（2）番屋跡

江戸時代、須川は幕府直轄地の天領（尾野山）と上田藩の領地との境に位置していたため「番屋」が置かれていました。江戸幕府は寛政年間（1789年～1801年）の『武家諸法度』の改正で、諸大名が勝手に関所を作ることを禁じていましたが、藩側も治安上の理由などから関所に相当する施設を必要としており、「関所」の名称を避けて「番所」の体裁で設置したのが口留番所です。この、須川にあった「番所」もこのようなものであったと思われます。



番屋には番人が交代で見張りをしていたのですが、須川の有力農民がこの番人の役割を務めていたものと思われます。諏訪形の古老の話では「須川には名字帯刀を許された農民が7人いた時期がある」とのことです。また、昭和の末頃までは刀剣類などが保管されていた農家もあった、とのこと。

写真右手の奥に続くのが旧道、右側の坂道を上ったところが「お伊勢様」です。番所があったと思われる場所は左側の竹藪が見えるあたりのようです。

（3）観応の擾乱と須川・尾野山

南北朝時代（室町時代の初期）の貞和5年（北朝の元号。南朝の元号では正平4年。西暦1349年）、将軍足利尊氏とその弟の直義（ただよし）との間で対立が起きました。「観応の擾乱（「日本史上最大の兄弟げんか」とも…）」と呼ばれる戦乱は、この時代の複雑な政治状況の中で、日本全国の権力者や朝廷までも巻き込んで全国に広がり、観応3年（南朝暦正平7年 西暦1352年）まで続きました。



足かけ4年にわたったこの戦乱は、直義の死去によって一応、尊氏側の勝利に終わりました。しかし、その後も対立はくすぶり続け、尊氏の孫、義満が3代将軍につくころようやく終息しました。こうして室町幕府は安定期を迎えることになりました。

ところで、あまり知られてはいませんが、「観応の擾乱」の古戦場が諏訪形の近くにもあります。

足利尊氏方の佐藤藏人元清という人が書いた「軍忠状（自分の軍功を主君に上申するための書状）」には、「信濃国小県郡夜山（よのやま）中尾で観応3年（1352）12月10日（旧暦）に最大の合戦があった」とあります。小県郡には「夜山」という地名は見当たらないのですが、須川地籍のすぐ隣、丸子の「尾野山中尾」のことではないかと考えられています。この「夜山（尾野山）中尾の合戦」では足利尊氏派（北朝）は信濃の国守護の小笠原政長勢力に対して、足利直義派（南朝）は諏訪直頼、祢津小次郎の信濃武士同士数千騎の戦いとなりました。

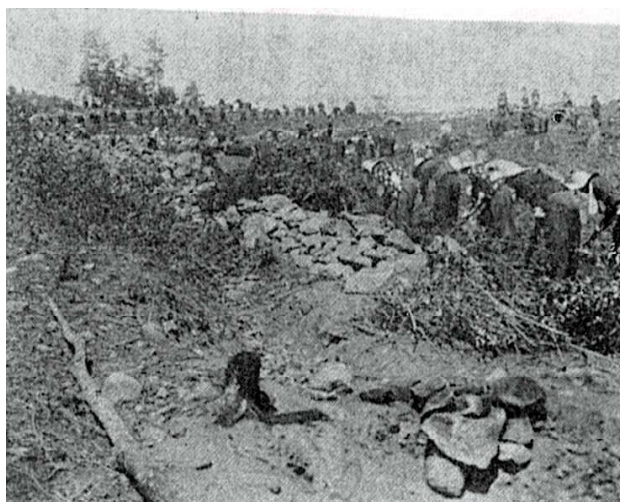
「中尾」地籍は尾野山集落の北西一帯にあります。この合戦の時、須川や尾野山の人たちは、両軍の勝ちどきや軍馬のいななきなどを耳にしながら、不安な時を過ごしていたのかもしれません。

参考文献：『上田市誌 歴史編 上田の荘園と武士』

（４）上田市立高等女学校生徒による原野の開墾

須川地籍には、上田市立高等女学校（現在の長野県上田千曲高等学校）の生徒たちが開墾した畑の跡があります。

1943（昭和18）年6月、政府は「学徒戦時体制確立要綱」を発表し、「勤労動員ノ強化」で食糧の増産のために、荒地などを開墾して「報国農場」を作り米、麦、大豆、ジャガイモなどの生産を指示しました。これを受け、長野県では8月に「学徒未開墾地開発計画」を各校に割り当てることとなりました。その中の「女子中等学校報国農場開発計画」によって、ひとり1日2坪（6.6㎡）5日間で10坪の開墾が指示されました。上田市立高等女学校（現在の長野県上田千曲高等学校）に対しては、上小地方事務所から小県郡殿城村石清水地籍の原野13反（約13000㎡）が割り当てられました。



8月19日と20日、上田市立高等女学校の一志教頭、小山農場主任、緑川、遠藤、清水各教諭が現地の調査と測量を行いました。現地は殿城山麓の難所で開墾は困難であるという結論に達しました。

そこで、一志教頭の責任で代替え地を探すことになったわけですが、21日には須川地籍の市有林伐採跡地約7000坪（約23000㎡）と、隣接の民有地が利用できることになり、この場所を開墾することになりました。この日の学校日誌には「愁眉を開き前途に希望を持つ」と記されています。8月22日には一志教頭らがさっそく現地を調査し、「眺望絶佳、開墾には好適地」という結論を出しました。また、隣接する民有地の地主高木利兵衛さんの了承を得ることもできて、上田市立高等女学校ではこの場所で開墾作業を行うことになりました。

9月4日（土）には鋤入式が行われ、「上田市立高等女学校報国農場 昭和18年9月4日」と書かれた標柱が立てられました。開墾作業には生徒職員全員が参加し、9月4日から11日までと9月14日から23日まで行われて、完了しました。この間、上田市役所からリンゴ360個、上小地方事務所からはジャガイモ4俵、須川地区からは甘藷（サツマイモ）50貫（約190kg）がおやつとして贈られました。また、砂糖3200匁（約12kg）が特配されました。また、開墾作業に向かう生徒たちを、諏訪形をはじめ地域の人たちは手をふって送り、励ましたとのことでした。

開墾された土地で、11月には麦などの作物の蒔きつけが行われ、翌年、最初の収穫として小麦6石（約900kg）、大豆1.6石（約240kg）、甘藷700貫（約2600kg）、ジャガイモ600貫（約2200kg）、粟1斗3升（約23リットル）、そば3.1石（約450kg）などが記録されています。また、昭和19年（1944）11月には農場の横に集納舎が建てられ、農具置き場兼休憩所として利用されるようになりました。

なお、『諏訪形誌』には、この上田市立高等女学校生徒らによる開墾作業が昭和19年または20年に行われたように読み取れる記述がありますが、『長野県上田千曲高等学校60年誌』によるものが正しいのではないかと思います。

この開墾地は戦後、須川の人々に私有地として割り振られました。地域の方の話によると「持っている土地が少ない人から優先的に割り振られた」とのことです。途中までではありますが舗装工事も行われ、現在でもその跡が残っています。また、当時植えられたクワが現在では大木となって何本か残っています。

この土地ではまず、薬用ニンジンが栽培されました。その後、ブドウ畑に変わりましたが、現在ではかつての石積みなどが残っているだけで、ほぼ荒地の様相となっています。



なお、『諏訪形誌』104ページに上田市立高等女学校（現在の上田千曲高等学校）の生徒たちが開墾を行った場所として示されている場所は誤りがあります。詳しくは本稿の「10小牧城・小牧山・東山」の5ページをご参照ください。

参考文献：『長野県上田千曲高等学校60年誌』

（5）横林家住宅

出桁造り（だしけたづくり）と呼ばれる構造を持つ建物です。「出桁造り」とは、梁または腕木を側柱筋より外に突出して、その先端に桁を出した構造で、江戸時代以来一般的だった町家（店舗兼住宅）では、軒を深く前面に張り出した「出桁造」による立派な軒が商店の格を示していました。関東の重厚な町家でよく見受けられます。このようなことから、「横林家」が地域の有力者であったことが想像できます。



出桁造りとは、軒を深く出すために、垂木をささえる桁を胴差よりも外に出した納まりのこと。出し桁は、桁を化粧材とするために、すべて鉋仕上げとなり仕口も重なりが見える。そのために丁寧な仕事が必要とされて、大工仕事が格段に厄介になる。出し桁は重厚な雰囲気になるので、商家などで用いられた。

「タクミホームズ 建築用語集」より

（6）三夜堂

「三夜堂」は一般に「二十三夜堂」とも呼ばれ、勢至菩薩を本尊としています。下弦の月の夜を「二十三夜」と呼びますが、「三夜堂」はこの二十三夜に女性が集まって念仏と唱え、茶会の席がもたれた場所です。「三夜」が「お産」に結びついて、安産祈願のお祭りとなっていたと言われています。ただ現在では、須川地域の人たちでもこのような行事について知る人はいないようです。

三夜堂の建物は以前は、須川の公民館として使われていたとのことですが、傷みがだいぶ激しくなっています。また、三夜堂に安置されていた「地藏菩薩座像」と「勢至菩薩立像」は、現在は須川公民館に安置されています。須川の三夜堂周辺には道祖神や筆塚もあります。



地藏菩薩座像



勢至菩薩立像



筆塚



道祖神

(7) 須川池（須川湖）

須川池は、小牧山（標高749m）と、陣屋の峯（標高797m）の間の窪地に位置しています。承応3年（1654）から明暦3年（1657）の仙石氏が上田藩主を務めていた時代に、ため池として改修されたと記録されています。標高720m、周囲3km、最大水深4.6mの人造湖です。なお、私たちはふだん「須川湖」と呼ぶことが多いのですが、正式名称は「須川池」とのことです。



須川湖は灌漑用水としてのみならず、人々の憩いの場として、また、釣りやハイキングの適地としても愛されています。古くはスケート場として知られ、1953（昭和28）年2月には「全日本スピードスケート選手権大会」も開催されました。須川湖でスケートをしたという記憶をお持ちの方も多くいらっしゃると思います。右の写真は須川湖畔にあった「湖月荘」です。

(8) 大山祇神社

須川湖のすぐ近くに「大山祇神社」があります。この神社について、『諏訪形誌』では次のように紹介されています。

須川池南側にある小高い丘の上、松林の中に、高さ90cm、間口45cmほどの石祠「大山祇（おおやまずみ）神社」が祀られています。「大山祇神」は伊邪那岐命（いざなぎのみこと）と伊邪那美命（いざなみのみこと）との間に生まれたとされる神です。記紀神話では「山の神」とされ、地上世界神の代表的な存在です。大山祇神社の本社は、愛媛県今治市大三島にある「式内社伊予国一の宮（旧国幣大社）」で、海の神、酒の神、田の神として、また、軍神、武神としても古くから信仰を集めてきました。どのような理由で大山祇神社が須川に勧請されたのかについて、はっきりとしたことは伝わってはいませんが、須川地区が森林資源の宝庫であることから、山を支配する最高の神である大山祇神を祀ったのではないかと考えることもできます。また、7年に一度行われる「生島足島神社」の御柱祭で使われる「御柱」は、須川地区から提供されていました。



大山祇神社の祭りは毎年、八十八夜に行われています。隣村の尾野山など近郷からの参詣者も多く、消防団員が警備に当たっていたような時期もありました。また、現在は、諏訪神社の神社委員会が須川自治会とともに運営にあたっています。

【コラム 道しるべ】

須川から鴻ノ巣方面に向かう道沿い（大山祇神社への参道付近）に「長久保道・別所道」の行き先に加えて「地藏菩薩」の文字が掘られている珍しい道しるべがあります。建立年は不明です。「長久保道」とあるのは、「助郷」に駆り出された農民たちのための道しるべではなかったかと想像されます。

【コラム 須川への旧道】

諏訪形から須川へは、車では「県道上田・塩川線」を通りますが、この道以外にもなかなか良いハイキングコースがあります。

現在の「県道上田・塩川線」は1902（明治35）年に「須川新道」として開通した、と『諏訪形誌』73ページに記述されています。それ以前は「須川の庚申塔の前を通っていた」と記録されているので、このハイキングコースが当時の須川への旧道とほぼ一致するのではないかと考えられます。「子どものころ、須川湖にスケートに行くためにこの道を通った」と話してくださる方も多くおられ、「諏訪形誌を歩く」のイベントでもこのコースを歩く企画がありました。

ひと頃はほとんど通れないような状況だったようですが、最近は「マウンテンバイク協会」の皆さんなどによってよく整備されていて、快適に歩くことができます。コース入口から須川までの所要時間は、ゆっくり歩いて1時間ほどです。次ページにコースの概要を載せます（『諏訪形誌Web版から転載』）。途中に「月見堂跡・小牧」の道標がありますが、調査時点でこの道は途中から道がはっきりしない部分があって、要注意でした。

なおこの道とは別に、県道上田・塩川線沿いに時々途切れながらのショートカット的な山道もあるようです。「須川湖にスケートに行くのにこちらの道を通ったことがある」と話してくださる方もおられました。